シンポジウム「イメージとしての「文化大革命」」について

鈴木　健郎

2006 年 7 月 16 日に専修大学神田校舎において「イメージとしての「文化大革命」―映画『夜明けの国』をめぐって―」（主催＝専修大学土屋研究室＋中国倶楽部）と題する一般公開シンポジウムが行われた[(1)]。これは、文化大革命初期の中国（北京および東北地域）の実際の様子が結果的に大量に記録されている日本製のドキュメンタリー映画『夜明けの国』（時枝俊江監督・岩波映画製作所、1967 年公開）を会場で全編上映して資料とし、そこに映された「文化大革命（文革）」と現在判明している歴史的事実の対照をおこなうと同時に、「文革」をめぐる表象・イメージの国際比較（日本・中国・フランス）とその相互影響関係、60 年代の「文革」理解の社会的コンテクスト、現代の「文革」理解との関連といった観点と連結し、従来の狭い枠組みを超えた議論の文脈を提示しようとする試みであった。前半では土屋昌明（専修大学）・鈴木一誌（ブックデザイナー）・下澤和義（専修大学）・中島隆博（東京大学）の四氏がパネリストとして議論を提示し、後半では一般参加の公開討論を行い、全体の司会を鈴木健郎（専修大学）が担当した。公開討論には、当日フロアーに参加した、映画『夜明けの国』の脚本家である吉原順平氏、助監督の坂口康氏も発言し、盛んな議論が行われた。

このシンポジウムを原型とした『目撃！文化大革命　――映画『夜明けの国』を読み解く』（土屋昌明編著・太田出版社 2008 年）が本年４月に出版されたが、所収論文はシンポジウムのパネルからかなり変化しており、またシンポジウム当日の一般討論の記録も収められていない。本月報には、今回の特集に至る経緯とシンポジウムの概観（本文）、森瑞枝氏（國學院大學）整理によるシンポジウム討論記録、およびその後継続的に発展した問題関心から新たに書き下ろされた土屋昌明「『夜明けの国』の文化大革命と竹内好」、下澤和義「群集の肖像、眼差しのアーカイヴ」の二論文を収める。2006 年のシンポジウム、書籍、本月報の三つが相互参照されることによって、「文革」の歴史的「事実」や「表象」について、特定の時代・地域・思想に制約された見方を相対化し、より広い範囲における相互作用の文脈からとらえかえす研究方向が明確になることを期するものである。

以下に、シンポジウム当日のパネル発表と討論の要点を記す。四氏のパネル発表がひととおり終了した後に、パネリストとフロアが対話的に一般討論する形式で行われた（本誌「討論記録」参照）。まず議論の前提となる基本的な事実として、①『夜明けの国』は、日中友好の観点から「新中国」を撮影するという動機で企画された映画であり、そこに映っている「文革」は、当時のスタッフにとっては撮影開始後にまきこまれるように遭遇した想定外のものであったこ

と、②したがって、「文革」を正面から主題化する意識はなかったこと、③以上の事情により「文革」の記録としては不完全・部分的なものにとどまるが、それにもかかわらず文革の同時代記録映像として質・量ともに貴重なものであること、の三点が確認された（当時の製作スタッフへの事前インタビューおよび、スタッフが参加した一般討論でも確認）。その後パネル発表となった。

土屋昌明「映像と現実」は、『夜明けの国』という映画を通して「文革」を考察する方法について議論を提起した。その上で、この映画に描かれた「文革」の様子が中国の現地情報が不足していた当時の日本人には「事実」として意識され、当時の「文革」イメージを強く規定したこと、製作スタッフと観客の双方の認知枠組に60年代日本社会に特徴的な傾向が色濃くうかがわれることを指摘した。その上で、意識的・無意識的バイアスの存在自体を後知恵的に批判するのではなく、その存在を認めた上で反省的に『夜明けの国』の映像を吟味しなおすことによって映像の資料的価値を引き出す方法について見解を述べた。製作スタッフの意図やシナリオから方法論的にデタッチし、意識的に撮影された映像・無意識に映りこんだ映像を、現在判明している歴史的事実関係と詳細に対照して分析し、この映画に映っている「文革」・映っていない「文革」をともに明らかにしてゆくこと、それによって日本で過去に流通してきた「文革」のイメージの相対化と組み替えを試みることが提示された。

鈴木一誌「シナリオの帰趨」は、ドキュメンタリーにおける「シナリオ」の問題を提起した。「ドキュメンタリー」とはいえ、ある意図の下に企画されロケハンを行い撮影対象を選別し編集される映画には、多かれ少なかれ「シナリオ」が存在するといえる。しかも60年代日本の記録映画では作家性や問題意識を包含したしっかりした「シナリオ」があることが多かったことを指摘した。その上で、しかし『夜明けの国』では、意図せざる「文革」という大事件との遭遇を契機に、映画自身が予定調和的な「シナリオ」を破る瞬間が見られる点が興味深いと指摘し、さらに、しっかりしたシナリオがあったからこそ逆説的にそうしたことが可能になったのではないかと問い、またこうしたことは当日シンポジウム会場でこの映画を見て討論している自分たちにも再帰してくる問題であるとした。「シナリオ」を特定の意図に固定されたものではなく、自己からの逸脱をも潜在させるものとして捉え返す議論であり、ある種の意図と偶然性が深く絡み合った映画として『夜明けの国』を見る議論を提示したものであるといえる。

下澤和義「文革を遠く離れて―ゴダールを中心に―」は、『夜明けの国』とほぼ同時代のフランス映画『中国女』とを比較対照して分析することで、「文革」イメージの複数性・越境性・増殖性などの問題を指摘した。『中国女』に描かれた「文革」「紅衛兵」「毛沢東」などのイメージにオリエンタリズムや錯誤を見つけ出すことはたやすいが、その一方で、中国の文革において圧倒的な増殖性を示した毛語録の紅い色彩など、無意識に直接訴えかける力を有するシンボル

やイメージの力は、中国の文革、それを撮影した『夜明けの国』の映像、『中国女』の映像の中に通底する作用をおよぼしているのではないか、という議論が提示されたといえる。常に主観や意識的・無意識的願望が投影される人間の認知作用と、機械であるがゆえに撮影者本人の意識しない細部まで撮影してしまうカメラという装置とがからみあって形作られる問題は、本誌所収の下澤論文でも論じられている。

中島隆博「舌のない人間のように―撫順炭鉱での沈黙」は、『夜明けの国』における撫順炭鉱の沈黙シーンの意味を、被写体・映画製作者・映画鑑賞者について考察し、植民地支配や戦争の問題、「沈黙」や「感動」のメカニズムとその功罪を、夏目漱石から竹内好へと連結して論じた（竹内好については、本誌所収の土屋論文でも論じられている）。映画全体に対しては、そこに表現された「日常」や「顔」の問題が取り上げられ、単純さや不気味さと結びついた単一の全体に還元せず、「数え切れないものを数える」ような愚直さがあると評価する一方、撮影者と被写体の意識的・無意識的共謀、プロパガンダ的側面、そして一見「自然」で「日常的」なシーンに潜む「強制された自発性」の問題を提起した。

パネリストの発表に続いて一般討論がおこなわれた（詳細は本誌所収「討論記録」を参照）。討論では主に、①『夜明けの国』の企画・製作・上映・流通の経緯や事実について、②かつて若い頃にこの映画を見、シンポジウムで久しぶりに再見した方々の感想、③「文革」の政治的評価について、④「ドキュメンタリー」「記録映画」という形式における主観性・演出と客観性・記録性の問題、ひいては「事実」とは何かという問題、⑤映像や音楽や無意識的イメージの力や性質の問題、などが関連付けられながら議論がおこなわれた。主催者・パネリストが提示したのは、「文革」について個々の人間や社会が自己の状況や欲望を投影して形成する複数の「イメージ」を、今日判明している相対的に正確な歴史的「事実」と対照しつつ、それぞれの「イメージ」に現実的な正確さや正当性において差異が存在することは認めつつ、それぞれの優劣や真偽をことさらに言い立てるのではなくその存立の基盤や理由を問うてみようということであり、歴史学的知見と表象文化論や現象学的な観点を複合してみることであった。実際の討論では、こうした問題意識に沿った議論や、映画製作スタッフによる貴重な証言、様々な具体的体験談が聞かれる一方、自己の政治的見解や「文革」に対する思い入れを長時間語る人々や、議論のかみ合わない例も見られたが、こうした討論の状態自体が、現代日本における言説空間の様相の一例を示しているという意味で興味深いものであったといえるだろう。④の問題については、この種の問題提起に対する感情的反発も見られたが、「ドキュメンタリー」という形式を論じるために不可避の重要な論点である。シンポジウムにおいても、ある工場の「日常」を撮影しようとした時に、徹夜で工場に並べられた大量の「毛語録」を撤去するかしないかで論争になったエピソードとともに、その時に「毛語録」を撤去した工場の風景こそが中国人の「日

常」であるのか、それとも「文革」の最中にある人々が工場中に並べた「毛語録」を撮ることこそ「ドキュメンタリー」としてふさわしかったのか、という面白い議論が提起されていたことを付記しておこう。

注

(1) このシンポジウムの端緒は、社会科学研究所共同研究「東アジア世界における文化接触の諸相」（代表：土屋昌明）が 2005 年 7 月 23 日におこなった研究会における前田年昭氏「文化大革命の理想と日本―ドキュメンタリー『夜明けの国』」の研究発表である。